

生前にエンディングノートを

幸公民館で50人が聴講

人生の終末期や死後に「自分はこうしてほしい」という家族への希望をつづった「エンディングノート」についての講演「最高の人生の終わり方」が14日午後2時から、松阪市殿町の同市幸公民館(新良司朗館長)で行われた。講師は伊勢市にあるいせ在宅医療クリニックの遠藤太二郎院長(63)で、臨終が近くなった人の典型的な特徴や、こうしたノートを使って身辺を整理しておく必要性について話し、約50人の市民が耳を傾けた。

講演は同公民館が年に2、3回開いている生涯学習講座の一環。14日は



より良い人生の終わり方について丁寧に解説する遠藤院長＝殿町の市幸公民館で

長年、伊勢市立伊勢総合病院の内科医を務め、11年前に在宅医療のためのクリニックを開業した遠藤院長はまず死期が近づいた兆候として▼食事の量が減る▼寝ている時間が多くなる▼排せつ量が少なくなる―などがあると説明。さらに死期の1週間前になると▼夢と現実を行き来す

藤院長を招き、自分や身近な人の死に対し、どのような心構えで、何を準備しておけばよいのかを説明した。

遠藤院長はまず死期が近づいた兆候として▼食事の量が減る▼寝ている時間が多くなる▼排せつ量が少なくなる―などがあると説明。さらに死期の1週間前になると▼夢と現実を行き来す

量が少ない―などがあると説明。さらに死期の1週間前になると▼夢と現実を行き来す

このノートは親しい人へのお礼の言葉をはじめ、▼介護の方法についての希望▼重病の際の告知の有無▼延命治療の是非▼臨終に立ち会ってほしい人のリスト▼葬儀や埋葬の方法▼処分してほしい財産や預金口座▼形見分けやペットの行方―

現れると解説した。そして意識がはっきりしているうちに家族に伝えるべきことを伝えないと、本人も家族も悔いが残るとし、生前から家族と話し合いながらエンディングノートを作る大切さを強調した。

「などが細かく書き込めるようになっていて。こうしたことを生前から考えることで、話にくい話題を家族と共有するきっかけになるといい。遠藤院長は「終わりが良ければ全て良しの精神で、人生の着地を決めてほしい」と話していた。

ミャンマーの少数民族カチン族の一行14人が、14日午後2時15分、松阪市役所を訪れ、山中光茂市長や小林益久副市長に、ミャンマーで今なお続く内戦の現状を説明し、難民の支援を要請した。

カチン族はインドと中国に接するミャンマーの

ミャンマーの少数民族が受け入れや支援要請市に内戦の現状伝える

よき来た

とらさの

キダキのぼる

